



TITLE:

静脩 Vol. 13 No. 1 (1976.9) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 13 No. 1 (1976.9) [全文]. 静脩 1976, 13(1)

ISSUE DATE:

1976-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65955>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1976年9月

Vol. 13, No. 1

## 再任にあたって

附属図書館長 林 良平

この4月、わたくしは、商議会で再び附属図書館長に選任され、ひきつづいて図書館の運営の責任を担うことになった。この機会に、過去3カ年にわたくしの多少とも努力して来た問題点をひろって、今後の附属図書館運営の方向について全学のご関心を得たいと考えている次第である。

戦後、附属図書館の緊急の課題は、戦災の後の、著しく不便な学生諸君の学習の場と図書を何とか整理しようとする事、及び、全学蔵書の総合目録を完成し、少なくとも、学内において、相互の連絡の機能を高めようとする事であった。戦後30年を超えた今日からみれば、大した話題ともならない問題であるかも知れないが、歴代館長・職員のこれに費した努力と成果は、歴史的にみて、極めて重要かつ有意義なものであった。

しかし、このことがほぼ一段落し、学生諸君への奉仕についても各部局図書室にもみるべき進展があり、もとより完全とはいくに程遠いけれども、格段の改善のなされた今日、附属図書館に課せられた使命は、学生用図書の整備利用はもちろんのこと、さらに、研究用図書利用についていかに寄与できるかという新しいテーマにも取り組まねばならないことになった。全学共通的な研究用図書や目録、境界領域に関するものへの要求、といった蔵書の内容の変化、さらに全学で蔵書についての相互調整の必要、さらに、新しく発展する図書館業務処理の方法に応じて、職員の研修自己開発や、業務面での全学調整など、新しい使命が附属

図書館に課せられて来た。その上に、学外の他大学図書館との間で蔵書の相互利用の窓口には終局的に附属図書館があたねばならない。このような現象の底流をなすものは、爆発的な情報量の拡大と図書費が必ずしもこれに伴えない現状である。

これらのことは、本学図書館(室)が一体として機能することを必要とした。この調整にあたる附属図書館の業務量は飛躍的に拡大すると同時に、事からの性質上、全学図書機能の協力システムが不可避となって来た。

わたくしが三年前、館長に選任された当時、附属図書館のかかえていた問題は、大略このようなものであった。わたくしが、まず第一に、手をつけなければならなかったことは、全学の図書利用者・図書職員の相互理解であった。この大学の沿革から想像できるように、本学の図書のシステムは細部においては、各部局別々であるといつて多言でない。人びとはみずからが生み出し、その中で育ったシステムに誇りと自信と、そして愛着をもつことは当然である。それは、それとしてよいことなのであるが、ある場合には、異なったシステムに対する理解を困難ならしめる要因でもある。そして、各部局と附属図書館の相互理解にも障害となることもあった。

相互協力の前提としての相互理解。いづく行いがたく、心焦るのみで道の遠いことは、しばしばであった。理解のためには、現状を事実として直視することも必要であった。これまた、多くの

心理的負担を伴うものである。このようなプロセスを地道に積んだ上で、全学図書機能の新しいあり方を定着させること、附属図書館の立場からいえば、そのあり方を明確にすること、これが緊急の課題である。すべてのことに完全ということは望むべくして達し難いことのように思う。多少の不備は残るという批判はつねに避けられないであろうが、今後はこの課題を一つ一つ解いていくべき時期ではなかろうか。殊に、外から、図書館システムの進展の波が静かであるが、確かな足りをもって迫って来ているように思われる。文部省や国立大学協会、さらに国立大学図書館協議会（全国立大学加盟の団体）では、大学図書館のあり方について、つぎつぎと問題が提起されて来ている。これに対して、多くの大学で図書館のあり

方について、慎重有益な議論が展開している。

京都大学でも、このような論議の必要はもはや避けられないところまで来たように思われる。附属図書館の商議会や各種の委員会で、これらの問題に取り組むことはすでに始まっている。また若干の進展——試行錯誤を経ながらであるが——もみられたといってもよい。しかし、問題の性質上、直接これにタッチされた教官職員の間にだけ印象として残るにとどまり、まだ、全学の理解を得るには程遠い面のあることも否定できない。

今後は、静脩を通じて、附属図書館の場での教官・職員の努力の道すじを、全学の皆様にご理解頂くよう、努力することも欠かせぬものと考えている。同時に、全学の教官職員のご意見を、誌上を通じて頂くことにも努力したいと考えている。

#### — 資料紹介 —

### Science Citation Index

昨年度 Science Citation Index（以下 SCI）の 1965 年～1969 年の累積版（くわしくは Citation Index と Source Index の二つのパートで Permuterm Subject Index は含まず）が京大に備えられましたので、特徴—実際の使用法等を御紹介します。この索引は使用に当って特別な主題や分類体系の知識等を必要とせず、検索方法は非常に簡単なものですから広く利用されるよう期待します。

#### 1. 基本的な考え方

SCI は 1961 年に創刊され、既に 15 年の歴史を持っているにもかかわらず、目新しい、なじみのない索引と言う印象を与えています。これは索引を作る原理が他のものと全く異なっている所に原因があると思われます。学術論文は従前の成果をふまえて書かれ、この成果は引用文献として書誌的な事項を添え論文の中に示されます。引用した

### — 特徴と使用法 —

論文と引用された論文の間には (1) 取り扱う主題の関連があること、(2) ある一つの論文を引用している二つ以上の論文間にも普通主題の関連がある（図 1 参照。論文 A と B は共に E を引用している。B と A の間には関連があると考えられるもの）。したがって引用・被引用の関係をたどって行けばある主題に関連した文献を次々に検索できる、換言すれば、一主題に関する文献は引用・被引用の関係でネット・ワークを形成しておりこれを把握するのが非常に効果的な検索法であると言うのが SCI の基本的な考え方です。引用文献を次々にたどるのが有効で簡便な文献探索法であることは、現実には多くの研究者がこれを行っていることで一部裏付けられます。<sup>\*注1</sup>例えば「研究者の情報要求と利用に関する調査の京都大学分集計結果について」（静脩 52 号）では「必要な情報をどこから得ていますか」と言う質問に対し、学内の研究者

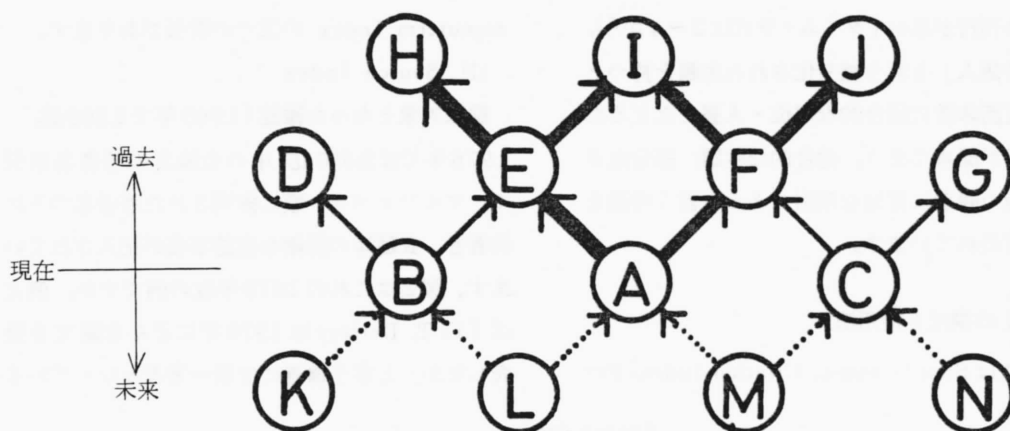


図1. 引用・被引用の関係で形成される関連論文のネット・ワーク、最も単純に一論文は先行の二論文を引用し後発の二論文に引用されるとしたパターン。矢印は引用関係A→EはAはEを引用したことを示す。

(自然科学)の96.96%が雑誌論文中の引用文献を主たる5つの内にあげ(2位は図書中の引用文献, 66.62%)これを第3位の「専門分野の抄録・索引誌等から」の65.58%と対比すればいかにこの方法が広く行なわれているかをうかがう事ができます。ただしこの方法では文献を過去に遡って直線的に探すことはできても(図1, 論文Aを起点とすれば太線の部分はたどることができる)ある文献を発表以後誰が引用したか、言いかえれば、その論文の主題は他の研究者によって、どのように発展させられたか(図A→L A→M)は検索できず、またAと同時期に発表された関連論文B, Cの検索も不可能です。これらを探索するためには、オリジナルを広く渉猟する、抄録・索引・レビュー等の二次資料による等の方法をとらなければなりません。SCIは引用をたどる方法を未来の方向A→L, A→M, と水平の方向A→(E)→B, A→(F)→Cに拡げることによってこの欠点を解消したもので、これによって直線的に過去に遡る「いもづる式」を「網の目」検索に変えたものと言えます。

## 2. SCI の特徴

SCI の特徴を考えるのに最も良い方法は従来の

索引・抄録に対する批判をSCI がどう解決しているかを見ることだと思われます。この批判は大体以下の4点にまとめられます。

- (1) 急激に増加する科学文献を抄録する上での時間のおくれ(タイム・ラグの問題)
- (2) 一主題に関して包括的な収録をする困難さ(抄録もれの問題)\*注2
- (3) 多くの分野での新しい情報を総合する必要のあるいわゆる学際領域に有効な索引・抄録が得がたいこと。
- (4) 用語の概念規定をめぐるもの。例えば採録者と利用者の間の解釈のずれ、また用語規定が厳密になるほど、用語間の関連等の知識を要するために「使いにくい」感じを持たせること。

これらの批判にこたえるために索引・抄録の作成に当りコンピューターを使用したり、用語集(シソーラス)を検討する努力が払われていますが、

(1)~(4)はすべて採録者が個々の論文を主題に分け、判断しなければならない事に帰着します。SCIは論文の執筆に当り著者が引用文献を選択する過程で主題の関連、内容の評価等の判断はすべて行なわれたものとして結果の集計のみで作成され、この採録者の判断にともなう問題を回避しています。

このため刊行が早い(タイム・ラグは2~4か月),  
「研究者個人」と言う細分化された主題を持つと  
同時に反面非常に総合的な単位・人脈をたどるた  
め, 検索が簡単であり, 総合的な主題, 細分化さ  
れた主題の両者に有効な索引であると言う特徴を  
持つとされています。

### 3. SCI の構成と使用法

SCIには Source Index, Citation Index, Pe-

rumuterm Index の三つの索引があります。

#### (1) Source Index

採録対象となった雑誌(1969年で2,200誌,  
1976年では2,600誌)中の全論文の著者名索引  
で, アルファベット順に排列された著者名の下に  
共著者, 表題等の詳細な書誌事項が記入されてい  
ます。図2はこれの1970年版の例ですが, 例え  
ば「C. T. Dolleryは1970年にどんな論文を  
発表したか」と言う調査には第一著者となっている

### Source Index

To locate a full description of a source item, look up the first author. Under a given name, journal articles of primary authorship are described first. Items of secondary authorship follow. These are cross-referenced to the first author whose name follows the word SEE.

Codes indicating type of source item:

- Blank articles, reports, technical papers, etc.
- A abstracts of published items
- C corrections, errata, etc.
- D discussions, conference items
- E editorials, editorial-like items
- I items about individuals (tributes, obituaries, etc.)
- L letters, communications, etc.
- M abstracts from meetings
- N technical notes
- Q bibliography for SCI supplied after primary publication, by source author
- R reviews & bibliographies

C.T. Dollery is first author of these Source items.

C.T. Dollery is one of secondary authors of these Source items.

First Source author	DOLLEAR FG	J AM OIL CH	47	173	70
	see MANN GE				
	see RAYNER ET		47	26	70
Coauthors	DOLLERY CT				
	DAVIES DS—CONDUCT OF INITIAL DRUG STUDIES IN MAN				
	BR MED BULL	26	233	70	3
	PATERSON JW—PROPRANOLOL IN HYPERTENSION				
	BR MED J	2	236	70	L
	DIFFERENCES IN METABOLISM OF DRUGS IN MAN				
	DEPENDENT ON ROUTE OF ADMINISTRATION				
	DRUG INTEL	4	348	70	M NO R N12
	DRAFFAN GH DAVIES DS WILLIAMS FM CONOLLY ME—				
	BLOOD CONCENTRATIONS IN MAN OF FLUORINATED				
	HYDROCARBONS AFTER INHALATION OF PRESSURISED				
	AEROSOLS				
	LANCET	2	1164	70	3R N7684
	ADVANCES IN TREATMENT OF HYPERTENSION				
	PRACTITION	205	486	70	14R N1228
	see BLACKWEL EW	BR J PHARM	39	P194	70
	see BRECKENRA	Q J MED	39	411	70
	see BULPITT CJ	CARDIO RES	4	207	70
	see CONOLLY ME	CLIN SCI	38	P 10	70
	see HELLER H	BR MED J	4	233	70
	see KOHNER EM	AM J OPHTH	69	778	70
	see "	BR MED. BULL	26	166	70
	see NEALE G	DIABETES	19	703	70
	see WARRELL DA	BR MED J	3	207	70
	see "		1	65	70
Cross-referenced secondary author	DOLLET J				
	see (BASTIEN PG	METAL CONST	2	9	70
	see MAYNIER P	REV METALL	67	343	70
	see PONT G	MEM S R MET	67	629	70
First Source authors	DOLLEZHA NA				
	ALESCHCHI EVDOKIMO YV EMEYANOIY IVANOV BG				
	KOCHETKO LA MINASHIN ME MITYAEV YI NEVSKII VP				
	SHASHARI GA OPERATING EXPERIENCE WITH BELOYARSK				
	NUCLEAR POWER STATION				
	SOV AT EN R	27	1153	69	11R 5
	DOLLFUS A				
	COFFEEN DL—POLARIZATION OF VENUS 1 DISK				
	OBSERVATIONS				
	ASTRON ASTR	8	231	70	12R 2
	FRYER R TITULAER C—(FRI) PRIMITIVE ATMOSPHERE OF				
	PLANET MARS ACCORDING TO PHOTOGRAPHS TRANSMITTED				
	BY INTERPLANETARY PROBES MARINER 6 AND MARINER 7				
	CR AC SCI B	270	424	70	2R N6
	FRYER R TITULAER C—(FRI) PRIMITIVE ATMOSPHERE OF				
	PLANET MARS ACCORDING TO PHOTOGRAPHS TRANSMITTED				
	BY INTERPLANETARY PROBES MARINER 6 AND MARINER 7				
	CR AC SCI B	270	424	70	4R N6
Language code	(FRI) SURFACE ANOMALIES IN HELLAS REGION OF MARS				
	SURFACE				
	CR AC SCI B	270	641	70	7R N9
	(FRI) OPTICAL DETERMINATION OF SPHERICAL DIMENSIONS				
	OF PLANET MARS				
	CR AC SCI B	271	1041	70	15R N20
	NEW OPTICAL MEASUREMENTS OF DIAMETERS OF JUPITER,				
	SATURN, URANUS, AND NEPTUNE				
	ICARUS	12	101	70	5R 1
	see GEAKE JE	SCIENCE	167	717	70
	see HEDEN C	ICARUS	11	221	69
	DOLLFUS DS				
	see VITREY M	REV NEUROL	122	528	70
	DOLLFUS RP				
	(FRI) ON SOME TETRAHYNCH CESTODES (HETERACANTHES				
	AND PECILACANTHES) COLLECTED FROM MEDITERRANEAN				
	FISHES				
	VIE MILIE A	20	491	69	10R 3

もの5編, 他の人と共著で第二著者等に扱われているもの11編, 計16の論文が一目で検索できます。Source Indexは特定の著者がある期間にどんな論文を発表したかを調べる, Citation Indexで検索した論文の詳細な書誌事項を確かめることの二つが主な使い方になります。(図2)

#### (2) Permuterm Subject Index

PermutermはPermuted(並べかえた, 順列に組んだ)Term(語)の合成語で, これが示すように論文のタイトル中のキーワード二語を組み合わせた主題索引です。表題中のキーワードをそのまま利用し, コンピュータ処理で作成される点はKWIC, KWOC等と同様ですが主題を順列組み合わせ的に並べたキーワードのペアで示す点に特色があります。この索引は現在未購入です。

#### (3) Citation Index

これはSCIの中心をなす索引で, ある特定の論文を誰が, どこに引用したかを調べるものです。これを利用するためには起点となる論文を決める必要があります。研究者は既に何等かのかたちでこの論文を把握しているのが普通ですが, 新しく探索を始める場合, ある個人の業績に関心があればSource Indexが, 特定の主題に関してはPermuterm Subject Indexがこの起点を定めるのに役立ちます。Citation Indexはいわば「引用された論文の著者名を見出し語にした索引」になっており, 起点となる論文を決定すれば後の検索は非常に単純な作業になります。(図3参照, Citation Index 1970年版の例)例えばD. Aaronsonの論文は1970年(版)にはどのように引用されたかを見るにはAaronson, D.を引きます。著者名の下に論文が1966年の学位論文から68年J. Exp. Psychol.に発表したものまで年代順に5点あげられその各々を引用した著者名, 掲載誌, 巻数, ページ, 刊行年が記載されています。各々の内容を知るためのタイトル等の詳細を見る場合はSource Indexを引く必要があります。また同

様にBs AaronsonのJ. Gerontol. 21巻, 458ページ, 1966年の論文はJ. BotwinicとJo. Brittonの二人に引用され前者はレビューであることが論文の種類を示すコードRからわかります。この論文の種類を示すコードA~Rを利用すれば「ある問題に関するレビューがあるか」「ある人の業績集は発表されているか」「この論文の訂正, 方法の改良等の文献があるか」等々の調査が可能になります。

#### 4. 利用の技術例

上に述べたようにSCIの三つの索引は各々独自の用途を持っており, 個別でも十分利用できますが, SCIが最も効果を上げるのはこの三者を上手に組み合わせて利用した場合だと言えます。図1で起点A中の引用文献からEを知り, EからCitation IndexでB, 同様にDとKと言う過去と現在の往復運動をSCIではサイクリングと称していますが, Source IndexでAと同一著者の論文A' A''...を得てそれを起点とする, またPermuterm Subject Index全く新しい起点を得て第二, 第三のサイクリングを行なうことで平面的なネット・ワーク把握を立体的なものにすることが可能になります。また, SCIは引用・被引用の関係を主題の相関関係としているため, 関連の非常に密接なものから, 軽微なものまでが検索されると言う疑念, いわゆるノイズの問題があります。これを避けるため, 検索に当って起点を二つ設け, この両者を共に引用していることを条件にする方法(Bibliographic Coupling)等も用いられます。SCIはこれまで述べたとおり構成, 利用法共非常に単純なものです, 単純なだけに利用者がいろいろな工夫をすることにより新しい探索の可能性を秘めた索引であると言えます。

#### 注1

SCIが有効かどうかはこれだけでは十分な傍証になりません。論文中の引用文献とはどんな意味を持つかが

Science vol.155, (1967) 1213~

SCIは採録対象を1976年で2600誌に限定しています。

(農学部 図書掛長 金井 孝)

## 学内図書相互利用書の利用について

「学際」という言葉の誕生を見たことによって、  
も知れるように、特に研究分野の細分化の問題ひ  
いては学問の間の問題が重視されるにおよび、そ  
れに加えて情報の増加がともなう、文献の利用  
形態も一部局から数部局へと広がらざるを得ない  
状態になっている。

こうしたことから、学内相互利用の必要性が生  
れ、京都大学での各種図書館(室)としても学生お  
よび研究者のために、利用範囲の拡大が計られね  
ばならないことは当然といわねばならない。従っ  
て、すでに昭和43年度より附属図書館商議会の  
議を経て「部局間の図書相互利用の促進」の下に、  
「学内相互利用書」の様式が作成され実施されて  
きた。

しかし、最近その相互利用書の発行・利用など  
の過程で利用者および図書館(室)の双方に、取扱  
いについての乱れが生じているという指摘が各方  
面からあり、その正しい利用についてここに改め

てお知らせする必要があると思われるので、次に  
その要点を列記し各位の認識の喚起をうながす次  
第である。

### 記

1. 相手部局図書館(室)の図書閲覧貸出規則を  
遵守すること。
1. 希望する図書が自己所属図書館(室)に所蔵  
されているかどうかをよく調べること。
1. 希望する図書が現に相手部局図書館(室)に  
在架していることを確認すること。
1. 「相互利用書」の使用は原則として発行当日  
に限ること。
1. 「相互利用書」の㉔票は必ず発行した図書館  
(室)に残すこと。
1. 返却に際しては、返却図書と引換えに渡され  
る「相互利用書」の㉕票を発行した自己所属の  
図書館(室)まで持参すること。

## 開架図書室の拡張

本館2階北側に位置する開架図書室は、ここ数  
年来、改装、更に図書配架スペース拡張と、工事  
の音が絶えなかった。本年も、昨年に引続いて図  
書配架スペースの拡張工事が行われ、収容冊数が  
23,750冊と、従来より約6,000冊増のスペース  
が得られた。

昭和49・50年度にわたる指定図書費の配付、  
これに加えて昭和50年度における学生用図書  
費の大巾な増額が、関係当局及び大学の努力によ  
り実現し、格段の資料の充実が行われたものである。  
開架図書室としては、この冊数では甚だ不満足

なものであるが、既設の建物に加重する物理的な  
面の制約などにより、これも止むをえない状況である。

今更いうまでもないが、利用者が直接、これら  
資料に近付き、手にすることができる開架図書室  
の充実、図書館の重要な機能の一つでもあるの  
で、今後の課題として、内容の充実、利用面など  
についても更に検討していきたい。

利用者の皆様には、拡張による座席の減少、工  
事中の閉室など、御迷惑をおかけいたしましたこと  
をお詫び申上げるとともに、ご理解をお願いいたし  
たい次第である。



## 英国二次資料展の開催

英国大使館より文部省学術国際局情報図書館課を通じ、英国における抄録、索引等の二次資料約200点が下記のとおり展示されて、同国の学術情報活動の一端に触れることができた。開催期間中には約300名の教職員および学生の来館があった。

記

附属図書館	6月 9日(火)～11日(金)
農学部図書室	6月14日(月)～15日(火)
医学図書館	6月17日(木)

## 第23回 国立大学図書館協議会総会

〈と き〉 昭和51年6月4日(金)～5日(土)

〈ところ〉 名古屋ターミナルホテル

昭和51年度総会は、東海地区を当番館として名古屋市で開催された。

第1日の午前は、各特別委員会、調査研究班の報告、新役員館の選出があったのち、岸本奨励賞表彰式が行われた。本年は「東洋学関係資料(石浜文庫)の整備に関する功績」で、9年間の努力が実って大阪外大布川掛長、「理工系大学における図書館業務の電算化」で成果をあげた東工大ワーキンググループ、「大学図書館における目録業務の改善」に独創性と努力を認められた広品川掛長が選ばれた。

午後は、文部省説明があったのち、「大学図書館改善要項の改訂をめぐる諸問題」をテーマに研

究集会がもたれた。研究集会は、本協議会に設置された、「大学図書館改善」調査研究班の各委員による事項別報告を基として討論が行なわれたが、終始熱気に満ちた2時間であった。

第2日目は、全国9地区より提出された協議題について、3分科に分かれ、第1は、一般的事項及び運営に関する問題、第2は、予算及び人事、第3は、奉仕及び技術的問題について各々協議が行なわれ、そのまとめが、午後の全体会議に報告され、さらに討議が重ねられた後、ある事項については既設の特別委員会等でさらに検討する。また、文部省その他に要望する事項が整備され、これらの具体的取扱いについては総括理事会に一任され総会は終了した。

## 第45回 近畿地区国公立大学図書館協議会総会

〈と き〉 昭和51年5月7日(金)

〈ところ〉 大阪市天王寺「なにわ会館」

昭和51年度総会は、文部省情報図書館課沙藤専門員の出席を得、大阪府立大学を当番館として開催された。

前年度事業の一般経過報告につづいて、企画、

参考図書、図書館統計の各委員会報告が、各主査から行なわれた。

つづいて、本年度は役員館の改選期に当るので、これの選出が行なわれた。その結果、以下の各大学が選出された。

幹事館：京都大学・大阪市立大学 主査館：大阪

大学<図書館業務機械化委員会> 大阪市立大学  
<図書館統計委員会> 指名館：京都工芸繊維大学、大阪教育大学、和歌山大学、奈良県立医科大学、神戸市立外国語大学、姫路工業大学、大阪市立大学

昭和51年度の事業計画は次のように決定された。

1. 企画委員会 <主査館：京都大学>
2. 図書館統計委員会 <主査館：大阪市立大学> 本年度も継続する。
3. 図書館業務機械化委員会 <主査館：大阪大学> 昨年度は休止していたが、本年度は新たなテーマを検討のうえ、活動に入ることになった。

なお、参考図書委員会は、約9年間にわたり活動を行ない、参考業務とは何か、の原点から問題を掘起し、この業務の重要性は勿論のこと、大学図書館の現場に如何に定着させ、利用者に満足を与え得るかの基本的な考え方から発足した。そし

て、活動のまとめとして邦文書誌所在目録の作業にかかったが、予算、各館の事情により、実現不能となりついに前年度限りで活動を停止することになった。

この外研究集会として

1. 図書館施設、主題別、業務別、講演会などがあるが、これらの具体化については、企画委員会で決めることになった。

なお、館長懇談会、大学図書館基本問題、相互協力などについても討議があったが、これについても、企画委員会で検討することになった。

協議終了後文部省情報図書館課沙藤専門員から、昭和51年度大学図書館関係主要予算額事項別表をもとに説明があり、つづいて、大学図書館改善協議会について、本協議会の目的、問題点、現在行なわれている検討事項の報告があり、更に図書資料の集中、分散制、図書館長の専任、併任制について質疑応答があった。

なお総会終了後の企画委員で、本年度の事業計画として次のことが具体化された。

委員会： 前述の企画委員会、図書館統計委員会、図書館業務機械化委員会はそれぞれ活動に入る。

研究集会： I. 図書館施設見学 これは次の二大学を予定する。①大阪女子大学図書館 ②甲南女子大学図書館 日時その他については、企画委員会メンバー校が折衝することになった。

II. 講演会 ①とき：昭和51年10月中

ところ：大阪大学吹田図書館

演題：英国における大学図書館の機械化について

講演者：大阪大学附属図書館参考掛長 門口泰典

②とき：昭和51年9月27日(月) ところ：京都大学楽友会館 演題：“英国国立図書館について”

講演者：The British Library Dr. K. P. Barr

※②については京大主催の講演会を地区協議会とした。

III. 館長懇談会・事務長懇談会 地区協議会としては初めての試みであるが、当日は附属図書館の当面の諸問題について話合われる。

とき：昭和51年9月10日(金) ところ：御車会館

## 利用者別利用状況

昭和50年度

利用者別 利用区分		関 覧			貸 出	合 計		昭和49年度		差	
		開 架	庫 内	計	庫 内	冊 数	人 員	冊 数	人 員	冊 数	人 員
1. 学 生	教 養	10,765	1,470	冊 12,235	冊 198	冊 12,433	人 7,163	冊 13,516	人 7,929	冊 -1,083	人 - 766
	法	19,381	712	20,093	792	20,885	11,525	20,262	10,965	+ 623	+ 560
	経	1,255	303	1,558	324	1,882	1,139	2,195	1,263	- 313	- 124
	文	3,760	2,326	6,086	2,724	8,810	5,363	7,456	3,705	+ 1,354	+ 1,658
	教 育	970	143	1,113	288	1,401	871	1,013	588	+ 388	+ 283
	工	6,465	348	6,813	846	7,659	4,839	8,256	4,835	- 597	+ 4
	理	6,720	257	6,977	337	7,314	4,221	7,555	4,116	- 241	+ 105
	農	549	185	734	436	1,170	791	1,264	791	- 94	0
	医	290	38	328	37	365	231	302	157	+ 63	+ 74
	薬	945	20	965	46	1,011	591	408	239	+ 603	+ 352
2. 大学院 生		3,731	3,407	7,138	2,537	9,675	4,772	8,746	4,009	+ 929	+ 763
3. 職 員		288	2,064	2,352	2,074	4,426	1,808	4,841	1,555	- 415	+ 253
4. 研修員ほか		1,839	1,961	3,800	539	4,339	1,442	3,103	847	+ 1,236	+ 595
5. 学 外 者		523	5,798	6,321		6,321	1,064	5,382	1,189	+ 939	- 125
合 計		57,481	19,032	76,513	11,178	87,691	45,820	84,299	42,188	+ 3,392	+ 3,632
1 日 平 均		216	78		41	335	172	329	165	+ 6	+ 7

利用者別 利用率		50年度(冊数)		前年度との比較			
		開架図書	庫内図書	49年度	50年度	差 引	
						パーセント	冊 数
1. 学 生	教 養	18.8	7.1	16.0	14.2	- 1.8	- 1,083
	法	34.0	7.2	24.0	23.8	- 0.2	+ 623
	経	2.2	3.1	2.6	2.2	- 0.4	- 313
	文	6.5	23.3	8.8	10.0	+ 1.2	+ 1,354
	教 育	1.7	2.2	1.2	1.6	+ 0.4	+ 388
	工	11.3	5.8	9.8	8.7	- 1.1	- 597
	理	11.8	2.6	8.9	8.3	- 0.6	- 241
	農	1.0	2.9	1.5	1.3	- 0.2	- 94
	医	0.5	0.4	0.4	0.4	0	+ 63
	薬	1.7	0.3	0.5	1.2	+ 0.7	+ 603
2. 大学院 生		5.9	20.5	10.4	11.0	+ 0.6	+ 929
3. 職 員		0.5	12.2	5.8	5.1	- 0.7	- 415
4. 研修員ほか		3.2	3.8	3.7	5.0	+ 1.3	+ 1,236
5. 学 外 者		0.9	8.6	6.4	7.2	+ 0.8	+ 939
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0		
%		65.5	34.5		100.0		

## 分類別利用状況

区 分		閱 覧			貸 出	合 計		
分 類 別		開 架	庫 内	小 計	庫 内	合 計		利用率
和 書 ( ) 内は N D C	1 宗 教 ・ 哲 学 (1)	2,497	1,654	4,151	690	4,841		6.4
	教 育 (3)	977	209	1,186	244	1,430		1.9
	2 法 律 ・ 政 治 (3)	17,186	723	17,909	772	18,681		24.6
	3 経 済 ・ 社 会 (3)	3,561	916	4,477	654	5,131		6.8
	4 文 学 (9)	2,672	5,863	8,535	3,650	12,185		16.1
	語 学 (8)	1,838	320	2,158	140	2,298		3.0
	5 歴 史 ・ 地 理 (2)	1,702	2,494	4,196	1,448	5,644		7.4
	6 自 然 科 学 (4)	14,296	202	14,498	533	15,031		19.8
	7 医 学 (4)	527	77	604	200	804		1.1
	8 工 学 (5)	2,648	97	2,745	106	2,851		3.8
	軍 事 (3)	64	41	105	60	165		0.2
	芸 術 (7)	538	904	1,442	657	2,099		2.8
	9 産 業 (6)	303	243	546	567	1,113		1.5
	10 全 書 ・ 叢 書 (0)	56	2,544	2,600	769	3,369		4.4
和 書 ( ) 内は N D C	図 書 館 学 (0)	4	31	35	111	146		0.2
	計	48,869	16,318	65,187	10,601	75,788		100.0
	1 Philosophy (1)		2	2	11	13	)	
	Aesthetics (7)		3	3	1	4		1.0
	2 Social sciences (3)		27	27	41	68	)	
	Religion (1)		145	145	5	150		12.6
	3 Philology (8)	492	37	529	19	548		31.6
	4 Library science Bibliography (0)		35	35	32	67	)	
	Literature (9)		25	25	168	193		15.0
	5 History (2)		42	42	97	139		8.0
	6 European History (2)		10	10	18	28		1.6
	7 Sciences (4)		57	57	65	122		7.0
	8 Art. Music. Theatre. Sports (7)		86	86	54	140	)	
	Industries (5)		10	10	13	23		
	Agriculture (6)		1	1	5	6		
	Military (3)		0	0	1	1		9.8
	9 Geography & Travels (2)		5	5	2	7		0.4
	10 Encyclopaedia & Periodicals (0)		185	185	42	227		13.0
	計	492	670	1,162	574	1,736		100.0
和 書 ・ 洋 書 合 計		49,361	16,988	66,349	11,175	77,524		

昭和50年度

## 京 都 大 学 蔵 書 統 計

昭和51年3月末

部局別	計別 種別	増 加 数			累 計			備 考
		和 書 冊	洋 書 冊	合 計 冊	和 書 冊	洋 書 冊	合 計 冊	
図 書 館		9,451	1,843	11,294	335,181	139,220	474,401	
文 学 部		3,690	2,998	6,688	351,737	202,347	554,084	
教 育 学 部		1,343	933	2,276	30,477	28,931	59,408	
法 学 部		2,350	2,820	5,170	164,882	221,373	386,255	
経 済 学 部		2,588	1,373	3,961	139,685	150,878	290,563	
理 学 部		443	2,164	2,607	31,225	154,626	185,851	
医 学 部		601	2,015	2,616	28,034	75,225	103,259	
病 院		152	299	451	10,985	21,069	32,054	
薬 学 部		226	747	973	7,076	12,529	19,605	
工 学 部		3,265	6,497	9,762	93,732	168,706	262,438	
農 学 部		3,368	2,239	5,607	130,397	117,407	247,804	
農 場		9	1	10	1,008	101	1,109	
演 習 林		366	85	451	5,636	2,241	7,877	
教 養 部		8,196	6,839	15,035	170,087	130,662	300,749	
化 学 研 究 所		117	1,022	1,139	6,151	19,896	26,047	
人文科学研究所		3,888	976	4,864	277,602	32,685	310,287	
結 核 研 究 所		9	126	135	1,142	2,054	3,196	
原子エネルギー研究所		65	461	526	2,944	5,974	8,918	
木 材 研 究 所		90	107	197	3,662	3,430	7,092	
食糧科学研究所		103	336	439	2,572	5,015	7,587	
防 災 研 究 所		157	615	772	5,091	9,409	14,500	
ウィルス研究所		26	383	409	231	3,182	3,413	
経 済 研 究 所		1,561	693	2,254	18,418	10,852	29,270	
基礎物理学研究所		43	790	833	2,195	18,050	20,245	
数理解析研究所		150	3,152	3,302	2,854	37,092	39,946	
原子炉実験所		1,940	1,807	3,747	8,087	14,723	22,810	
霊長類研究所		162	300	462	1,461	2,666	4,127	
東南アジア研究センター		356	2,125	2,481	2,959	10,141	13,100	
大型計算機センター		4	246	250	265	1,685	1,950	
経 理 部		69	11	80	4,128	423	4,551	
施 設 部		0	0	0	789	69	858	
医 技 短 大		1,994	101	2,095	1,994	101	2,095	
合 計		46,782	44,104	90,886	1,842,687	1,602,762	3,445,449	

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 13, No. 1 (通号53号) 1976年9月1日発行・編集発行人：須ノ内英夫  
 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電大代 751-2111 (内線) 2611 ~ 2641